

# 「雨に降られる」は間接受動文か？

和田 学

## 0. はじめに

次の様な「雨に降られる」を含む文は、間接受動文の典型的な例とされる。

(1) 私は/太郎はetc.雨に降られた

「雨に降られる」を間接受動文として挙げている文献としては、日本語の記述的研究では、寺村(1982:251), 村木(1999), 仁田(1999), 日本語記述文法研究会(2009:215), 生成文法関連では、井上(1976:79), Kuroda(1965:174, 1979), Miyagawa(1989:38), 柴谷(1978:323), Shibatani(1990:318), 影山(2006)等, 日本語学の入門書では、庵(2012:101), 啓蒙書では原沢(2012:83)など, 枚挙にいとまがない。この状況を見ると、(1)が間接受動文であることはもはや定説となっている感がある。

間接受動文の定義として、対応する能動文がないということが挙げられるが、事実、(1)には対応する能動文は存在しない。

(2) \*雨が私に/太郎に降った

また、間接受動文の最も顕著な特徴として、主語の有生名詞句が主語以外の部分が表す出来事によって被害を感じるということが挙げられるが、(1)はそれも満たしている。

一方で、原田(1977/2000)や、杉本(1999)の様に、(1)は、間接受動文に共通して見られる特徴が見られない点を指摘し、(1)を直接受動文とする論考がわずかながら見られる。

(1)を間接受動文とする立場も、直接受動文とする立場も、(1)が統語的あるいは生産的な過程によって派生するという立場を採る点では共通している。<sup>1</sup>

これに対し、本稿では、(1)が生産的な過程によって派生するという立場を採らず、「降られる」は、例外的に、語彙部門に登録された独立した語であることを主張する。以下に、本稿の構成を述べる。1節では、「降られる」を間接受動文とする立場を概観する。2節では、主に先行研究に基づいて、(1)を間接受動文とすることの問題点を挙げる。3節では、(1)を直接受動文とする立場を紹介し、その問題点を指摘する。4節では、「降られる」は、統語的な、あるいは生産的な過程によって派生するのではなく、「降られる」という形で、語彙部門に登録されている例外的な語彙であると主張し、その根拠を述べると共に、その主張により、文法の記述が簡潔になることを示

<sup>1</sup> 但し、記述的研究、入門書、啓蒙書は派生という過程には言及していない。

す。5節は、本稿のまとめであるとともに、今後の展望について触れる。

## 1. 間接受動文説

直接受動文に関しては、様々な立場があるが、間接受動文に関しては複文構造を形成すると仮定する点で、多くの研究が一致している。上述した様に、間接受動文の代表的な特徴として、1) 対応する能動文がない、2) 主語に対する被害解釈があるという特徴が挙げられる。(1)は、これらの特徴を見せることから、間接受動文とされることが多い。

(1) そのものの構造や、派生過程について明示的に述べた研究は筆者が知る限り存在しないが、(1)を間接受動文とするならば、次の様な複文構造が想定できるであろう。<sup>2</sup>

(3) [s太郎は [s雨にhur]-are-た]

間接受動文に複文構造を仮定する最もよく知られた根拠が主語指向の照応詞「自分」が間接受動文においては、主語と動作主のいずれも指し得るという点にある。その点で「自分」が主語しか指せない直接受動文とは異なる。<sup>3</sup> (4a)は間接受動文の、(4b)は直接受動文の例である。

(4) a. 花子<sub>i</sub>は太郎<sub>j</sub>に自分<sub>i</sub>の部屋に籠城された

b. 花子<sub>i</sub>は太郎<sub>j</sub>に自分<sub>i</sub>の部屋に閉じ込められた 久野 (1983:218)

しかし、「自分」が指せるのは有生名詞に限られ、動作主の位置に無生物の「雨」が現れる(1)では、「自分」によるテストで、複文性を確かめることはできない。

## 2. 間接受動文説の問題点

1節では、「雨に降られる」を間接受動文とする立場を概観したが、そこで挙げられた根拠は、この立場の妥当性を示している様に見える。しかし、一方で、この立場の問題点を指摘する論考もある。杉本 (1999) は、一般的な間接受動文の二格名詞句は、有生名詞句でなければならないのに対し、「降られる」の二格名詞句として現れる名詞句は有生名詞句ではない。(5a)では二格が有生であるため適格であるのに対し、(5b)では、有生ではないため不適格である。

(5) a. 太郎はカナリアに逃げられた 杉本 (1999)

b. \*花子は皿に割られた

<sup>2</sup> 影山 (2006) では (1) の類例である「雪に降られて」に対して、(3) と同様の構造を挙げている。

i) [p私は [p雨に降ら] れた]

<sup>3</sup> この一般化はN.A.McCawley (1973), Kuno (1973:303) 以下、多くの文献で言及されている。

これに対し、「降られる」の二格として現れる名詞句は有生名詞句とは考えられない。

(6) 太郎は雨/雪/霰に降られた 杉本 (1999)

杉本 (1999) は一般的な間接受動文の二格は、組織や、乗り物など有生物そのものではなくても「拡張」により、有生物相当となるとしている。

(7) a. 会社は賃上げを要求する組合にストライキを起こされた 杉本 (1999)

b. 太郎はバスに急発進されて、転んでしまった

しかし、この「拡張」は自然現象を有生物にすることはできない。

(8) a. \*付近の住民は川に氾濫された 杉本 (1999)

b. \*太郎は崖に崩れられた

従って、同じ自然現象である「雨、雪」等が何らかの有生物からの「拡張」によって有生物扱いをされるとは考えられないとするのが杉本の主張である。

更に、杉本 (1999) は間接受動文の二格に現れ得る名詞句の条件として、有生物に加えて気象現象も含めるという可能性も次の二点を根拠として否定している。第一に、有生物と気象が自然類を成すとは考えにくいとしている。第二に、気象名詞句でも二格を取って受動文を形成するものは限られていることを挙げている。以下の例では、気象に関する名詞句が受動文の二格として現れているが、いずれも不適格である。<sup>4</sup>

(9) a. \*太郎は雷に落ちられた 杉本 (1999)

b. \*太郎は空に曇られた

以上の観察は、「雨に降られる」が一般的な間接受動文とは異なることを示唆している。

三上 (1953:105) によると、一般的な間接受動文に現れる動詞は、「みずから然る」能動詞に限られ、所動詞は受動化しないとしている。影山 (1996:31) も同様に、非対格自動詞は間接受動を形成しないとして、次の様な例を挙げている。<sup>5</sup>

(10) a. \*突然、大地震に起こられて、動転した 影山 (1996)

b. \*成績に落ちられて、退学した

非対格自動詞は概ね意図性を持たない動詞であることを踏まえると、「(雨が)降る」という動詞は、非意図的である (三上の表現では、「おのずから然る」) ことから、非対格自動詞と考えられる。事実、松本 (1998) は、内在的状态変化は非対格であるとする、Tsujiura (1991) に従って「降る」は非対格であるとしている。これが正しいとすると、「雨に降られる」という文は、「降る」という非対格自動詞が、間接受動化されるという点で、一般的な間接受動文と大きく異なっており、非対格自動詞は間接

<sup>4</sup> 原田 (1977/2000:553) にも同様の指摘がある。

<sup>5</sup> 同様の観察は、寺村 (1982:249)、仁田 (1997:31)、Kitagawa and Kuroda (1992:Note 3) にも見られる。

受動文を形成しないとする簡潔な一般化を損なうことになる。

また、間接受動文は、意味的な整合性があれば生産的に作ることができるのに対し、すでに述べた様に、天候に関する動詞のうち受動文を形成するのは「降る」と「(風が吹く)」だけである。

(11) 私はそよ風に吹かれに外に出た 久野 (1983:195)

この生産性の低さは一般的な間接受動文と一線を画している。

また久野 (1983:195) で指摘されている様に、「降られる」と違って「吹かれる」には主語に対する被害解釈はない。<sup>6</sup> この点で「吹かれる」は一般的な間接受動文とは異なる。また、杉本 (1999) では、「吹かれる」の主語は無生物でも許されるが、これは一般的な間接受動文の主語が生物でなければならないことを考慮すると「吹かれる」を間接受動文とするには問題があることが指摘されている。

(12) 旗が風に吹かれて、たなびいている 杉本 (1999)

一方で、「降られる」は主語が生物でなければならない。

(13) \*庭が/道路が雨に降られた

また、杉本 (1999) が指摘する様に、「吹かれる」は「降られる」と違って気象現象以外の名詞句が二格を取れる。

(14) 太郎は扇風機の風に吹かれている 杉本 (1999)

以上の点から、「降られる」と「吹かれる」を間接受動文に分類することが不適當であるだけでなく、気象受動文として一括りにすることできないことを示している。

### 3. 直接受動文分析

「降られる」を直接受動文とする提案が原田 (1977/2000)、杉本 (1999) によってなされている。本節では、これらの先行研究に触れ、その問題点を指摘する。

原田 (1977/2000:553) は (15a) のような受動文は、(15b) を基底として、受身変形によって生成される、即ち、直接受動文であるとしている。<sup>7</sup>

(15) a. 太郎は雨に降られた

b. 雨が太郎に降った

(15b) の文法性には研究者の間で一致がみられないが、原田は、同じ気象を表す受動文でも、不適當なものは、能動文に二格を加えると完全に不適當になるので、これによって適格なもの和不適格なものを区別している。

<sup>6</sup> Shibatani (1990:331)、日本語記述文法研究会 (2009:241) にも同様の記述がある。

<sup>7</sup> (15b) の文法性判断は原田 (1977/200:553) による。井上 (1978:131)、杉本 (1999) は (15b) に? を付しているが、筆者の判断では不適當である。

- (16) a. ?花子がかみなりに鳴られた  
 b. \*かみなりが花子に鳴った

- (17) a. ?太郎は空に晴れられた  
 b. \*空が太郎に晴れた

この分析に対し井上（1978:132）は、(18) の例を挙げ、「受動文の主語に予定された「に」格の名詞句をこれらに与えておくこと」が恣意的であるとしている。

- (18) a. 私は赤ん坊に電車の中で泣かれて困った  
 b. \*赤ん坊が私に電車の中で泣いた

また、原田（1977/2000:553）も認めている様に、能動文が二格を取り、気象を表す動詞でも、受動化すると不適格になるものが存在することは、「降られる」を直接受動文とする分析への反例となる。<sup>8</sup>

- (19) a. かみなりが太郎に落ちた  
 b. ?太郎がかみなりに落ちられた  
 (20) a. 雨が花子に降り注いだ  
 b. ?花子は雨に降り注がれた

杉本（1999）も原田と同様に (15b) に?をつけつつも、「雨に降られる」は (15b) から派生した直接受動文であるとしている。

これらの分析の最大の問題点が、「雨に降られる」が適格性の低い (15b) から派生するとしている点である。また、(19b)、(20b) の様に、説明ができないものがあることも直接受動文分析の妥当性を損なっている。

杉本（1999）は、次の様な例の不適格性を、対応する能動文の有無によって説明しようとしている。

- (21) a. \*太郎は雷に落ちられた  
 b. \*農民達は霜に降りられ、農作物に被害を受けた  
 (22) a. \*雷が太郎に落ちた  
 b. \*農民達に霜が降りた

「雨に降られた」には、適格性は低いものの (15b) という対応する能動文があるのに対して、(21) には、対応する能動文がないために不適格になるという説明は一見成功している様に見える。

しかし、(21) の不適格性はより一般的な制約により、説明できる。非対格自動詞は間接受動文を形成し得ないということは、上に述べたが、(21) の不適格性は、非対格自動詞を含んでいることに起因すると考える方が、簡潔である。

<sup>8</sup> 文法性判断は原田による。筆者はいずれも受動文は不適格と判断する。

以上の様に、「雨が降る」を直接受動文と分析することは、間接受動文とする立場同様、不十分である。

#### 4. 提案

「雨に降られる」を間接受動文として分析する立場にも、直接受動文として分析する立場にも問題があることは、上に見た通りである。いずれの立場にも共通するのが、「降られる」を統語的に派生させようとする観点である。しかし、統語的な派生は、原則生産的であることが予測されるため、「降られる」の特異性を説明することができない。

これに対し、本稿では、「降られる」は統語的な派生ではなく、例外的に「降られる」という形で語彙部門に記載されている語彙項目であると主張する。語彙部門に登録されている項目には、統語部門で形成される構造と異なり、不規則性/特異性が許されるというのが一般的な考えであろう。「降られる」が語彙部門に登録されているとすれば、その特異性も容易に説明することができる。「降られる」の語彙情報をインフォーマルに表記すれば以下の通りになる。

- (23) 語幹：hurare-  
範疇：V  
項：X,Y  
意味：X=生物, 被害 Y=降水

以下では、この主張の根拠、及び、利点を述べて行く。

上述の様に、接辞-(r)are-は一般的には生産的な接辞と考えられている。実際、間接受動文は条件が満たされる限り（即ち非対格ではない限り）生産的に受動文を形成することができ、その意味も文の構成素の意味から導ける。その点で、間接受動文は統語的に形成されると考えるのは自然である。直接受動文は、生産性は高く、その意味も、間接受動文ほどではないが、構成素の意味から導け、やはり統語的過程と考えるのが妥当であろう。

しかし、一方で、受動形がありながら、その意味や統語的性質が能動形とは対応しないものがある。よく知られたものでは、「生まれる」が挙げられる。

「生まれる」は形態的には「生む」の受動形でありながら、その統語的性質は自動詞である。

- (24) a. 母は私を1988年に生んだ  
b. 私は(\*母に)1988年に生まれた

この事実は接辞-(r)are-を含んでいるが、「生まれる」は自動詞として語彙部門に登録

録されており、「生む」と「生まれる」は一般的な「他動詞—受動形」の関係を持たないと言える。<sup>9</sup>

同様に、形態的には「他動詞—受動形」の関係が成り立たないのが「恵む」と「恵まれる」の関係である。

(25) a. 日本は観光資源に恵まれている

b. \*(神が) 日本に観光資源を恵んだ

この例でも、「恵まれる」の統語的特徴や、意味を「恵む」から統語的に派生させることはできず、「恵まれる」が「恵む」とは独立に、語彙部門に登録されていることが示唆される。<sup>10</sup>

他にも、能動形と受動形の意味が異なるものとして、次の様なものが挙げられる。

(26) a. ??雨が/滝が太郎を打った

b. 太郎は雨に/滝に打たれた

更に、形態的には受動文でありながら、対応する能動文がないものが存在する。

(27) 取りざたされる-\*取りざたす 気圧される-\*気圧す

ほだされる-\*ほだす, うなされる-\*うなす

とられる-\*とらう

「うとまれる」は、辞書には「うとむ」という能動形が記載されているが、「うとむ」は筆者には廃語の様に感じられる。<sup>11</sup>

これらの動詞は、意味的には受動的である。即ち、これらは、主語の主體的な動作を表さない一方で、主語が、二格名詞句から何らかの物理的・心理的影響を受けることを表わす動詞である。

以上の点から、接辞-(r)are-を含む動詞の全てが生産的かつ意味的に透明である訳ではなく、一部には語彙部門に登録されていると考えざるを得ない動詞が存在し、本稿では、「降られる」もこれに類するものとする。

「降られる」を直接受動文にも間接受動文にも属さない語彙的な動詞であると仮定すると、先行研究において、問題となっていた事実が簡潔に説明できる。

第一に、「降られる」を生産的な受動化から切り離された語彙とすることによって、非対格自動詞は間接受動文を形成し得ないという簡潔な一般化を得ることができる。

<sup>9</sup> 「生む」の直接受動文は作りにくい、間接受動文は作ることができる。

i) 彼は愛人に子供を生まれて、大騒動になった

<sup>10</sup> 「恵む」の授受動詞としての用法では、通常の「能動—受動」のペアを作ることができる。

i) 彼は私におこずかいを恵んだ

ii) 私は彼におこずかいを恵まれた

<sup>11</sup> 「バスにゆられて」の様な例においても、能動形「ゆる」が存在しないことは、岩部浩三氏（私信，2019/6/7）に指摘していただいた。

これにより、上で触れた気象受動文が不適格であるという事実も、非対格自動詞を間接受動化したために不適格になると説明でき、これは、気象以外の出来事を表す非対格自動詞の間接受動化が不適格であるという制約により統一的に説明できる。<sup>12</sup>

(28) a. ?花子がかみなりに鳴られた

b. ?太郎は空に晴れられた

(29) \*成績に落ちられて、退学した 影山 (1996:31)

第二の利点は、第一の論点と関連するが、「降る」を非対格とすることができる点である。影山 (1993:60) は、「雨に降られる」を間接受動文とみなし、「降る」が間接受動化されることから「降る」が非能格自動詞であるとしている。しかし、なぜ「降る」が非能格であるのかの説明はされていない。上述の様に、非意図的な自動詞は非対格であるとするのが一般的なので、「降る」の様に意図性がない動詞を非能格自動詞とするためには、それなりの議論が必要である。しかし、「降られる」を生産的な間接受動化と切り離すことで、「降る」を非能格自動詞とみなす根拠は必要がなくなる。

第三に、「降られる」が例外であるとすることで、気象受動文の希少性が説明できる。即ち、原田 (1977/2000:553)、杉本 (1999) で述べられている様に、気象を表す動詞で受動化するものは非常に限られている。気象現象は非意図的な現象であり、非対格自動詞で表わされる。それ故、上述の制約により間接受動文には現れ得ないのは当然である。「降られる」は、例外であり、例外が希少であることは当然のことである。

以上に、「降られる」を例外扱いし、間接受動でも直接受動でもないと考えることによる利点を述べたが、しばしば、「降られる」と同様に扱われる「(風に) 吹かれる」について述べる。「吹かれる」は対応する能動文が成立しにくいいため、間接受動文と扱われることが多い。

(30) ?風が旗に吹いた 杉本 (1999)

しかし、「吹かれる」の主語には無生物が現れるという点で、一般的な間接受動文とも異なっている。

(31) 旗が風に吹かれて、たなびいている 杉本 (1999)

更に、有生名詞が「吹かれる」の主語として現れても、被害の解釈がないという点でも、一般的な間接受動文とも異なる。

(32) 私はそよ風に吹かれに外に出た 久野 (1983: 195)

「吹かれる」は「降られる」と異なり、気象以外の名詞も二格として現れる。

(33) 太郎は扇風機の風に吹かれている 杉本 (1999)

---

<sup>12</sup> 文法性の判断は原田 (1977/2000:553) のもの。先に注6で述べた様に、筆者はこれらの例を不適格と判断する。

本稿では、「吹かれる」も接辞-(r)are-を伴っているが、例外として語彙部門に登録されていると考える。その根拠は上記の様な例外性であるが、対照言語学的観点からも傍証が得られる。

韓国語は、間接受動文を持たない言語であることが知られているが、「吹く」に対応する自動詞文が存在する。韓国語の自動詞化の接辞は、非生産的で、意味的透明性が低いという点で、語彙的な接辞、即ち、その接辞がついた形で、語彙部門に登録されていると考えられる。「吹く」に相当する "pwul-ta" には、自動詞形 "pwul-li-ta" があり、次の様な例がある。次の例は小学館『朝鮮語大辞典』にある例文である(若干改変あり)。

- (34)      nakyep-i      palam-ey pwul-li-e      nalaka-ss-ta  
         落ち葉-Nom 風-Dat    吹く -Pass-Inf 飛んでいく -Past-Dec  
         落ち葉が風に吹かれて飛んで行った

この例は、風が吹くという事象が対象という意味役割を持つ名詞を主語とした自動詞にもなり得るということを示しており、「吹かれる」も形態は受動であるものの、実質的には自動詞であると考えることを支持する。

以下では、「吹かれる」の簡略化した語彙表示を示す。

- (35)      語幹 : hukare-  
         範疇 : V  
         項 : X,Y  
         意味 : X=対象, Y=風

「降られる」との違いは、Xに有生性に関する制限と、被害という解釈がない点である。

## 5. まとめと展望

本稿では、従来典型的な間接受動文とされて来た「雨に降られる」が間接受動文や直接受動文の様な生産的な接辞による統語的プロセスにより派生するのではなく、接辞-(r)are-を持ちながらも、語彙化された動詞であることを主張した。

この主張により、「雨に降られる」に見られる(がほとんど無視されていた)事実と記述的一般化の間の「ねじれ」を解消することができる。

また、この主張は、同じ形態素を含んでいても、語彙的に登録されたものと統語的なものが存在することを示している。この状況は、同じく、形態的には類似していても、語彙的なものと統語的なものに分けられる、複合動詞と並行している。これは同じ語形成規則が語彙部門にも統語部門にも存在する影山(1993)のモジュール形態論で説明できるかも知れない。

多くの文献で、「降られる」同様に、典型的な間接受動文とされる、「死なれる」も

また、語彙的な-(r)are-である可能性がある。「死ぬ」という出来事は、一般に非意図的であり、非対格である可能性があり、それが正しければ、非対格自動詞が間接受動文に含まれていることになるためである。<sup>13</sup> これについては、別稿に譲るが、他の-(r)are-の中にも、同類のものがないか、検討する必要があると思われる。

## 参考文献

- 原田信一 (1977) 「日本語に「変形」は必要だ」『月刊言語』10月号, 88-95
- 原田信一 (2000) 『シンタクスと意味 原田信一言語学論文選集』, 福井直樹 (編), 大修館書店
- 原沢伊都夫 (2012) 『日本人のための日本語文法入門』, 講談社
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 (上)』, 大修館書店
- 井上和子 (1978) 『日英対照 日本語の文法規則』, 大修館書店
- 庵功雄 (2012) 『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第2版』, スリーエーネットワーク
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』, ひつじ書房
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』, くろしお出版
- Kitagawa, Yoshihisa & Shige-Yuki Kuroda (1992) "Passive in Japanese," ms.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*, The MIT Press
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』, 大修館書店
- 久野暉 (1983) 『新日本文法研究』, 大修館書店
- Kuroda, Shige-Yuki (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*, Ph.D. Dissertation, MIT
- Kuroda, Shige-Yuki (1979) "On Japanese Passives," George Bedell, Eichi Kobayashi & Masatake Muraki (eds.) *Explorations in Linguistics in Honor of Kazuko Inoue*, Kenkyusha, 305-347. Reprinted in Shige-Yuki Kuroda (1992) *Japanese Syntax and Semantics: Collected Papers*, Kluwer, 305-347.
- 松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」, 『言語研究』114号, 37-83.
- McCawley, Noriko Akatsuka (1972) "On the Treatment of Japanese Passives," *CLS* 8, 259-270.
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』, 刀江書院, くろしお出版より再出版 (1972)
- Miyagawa, Shigeru (1989) *Structure and Case Marking in Japanese*, Syntax and Semantics

<sup>13</sup> 松本 (1998) は「死ぬ」も「降る」と同様、非対格である可能性を指摘している。

22, Academic Press

日本語記述文法研究会（2009）『現代日本語文法 2 第3部格と構文 第4部ヴォイス』,  
くろしお出版

仁田義雄（1997）『日本語文法研究序説 日本語の記述文法を目指して』, くろしお出  
版

柴谷方良（1978）『日本語の分析』, 大修館書店

Shibatani, Masayoshi（1990）*The Languages of Japan*, Cambridge University Press

杉本武（1999）「雨に降られる」再考』『文芸言語研究言語篇』 35, 筑波大学文  
芸・言語学系, 49-62.

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味I』 くろしお出版

Tsujimura, Natsuko（1991）"On the Semantic Properties of Unaccusativity," *Journal of  
Japanese Linguistics* 9,199-244.